
白月に涙叫を

善輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白月に涙叫を

【Nコード】

N6360U

【作者名】

善輝

【あらすじ】

与えられた役割、その為の力を受け止め、愛する人に着き従う青年
苦痛の運命に翻弄されながら、課せられた宿命の路を歩む少女

二人の男女の、月夜に織りなすハイファンタジーラブストーリー

序章 白と瓦礫 (前書き)

はじめまして、義輝と申します。

まだまだ至らぬ若輩者ですが、楽しんで読んでいただけたらと思います。

作中では多少のグロ描写、微エロ(多分)が混在すると思われるので、その点を留意していただけたらと思います。

誤字・脱字等ありましたら遠慮なく指摘していただけるとありがたいです。

それでは、この作品が貴方の心に少しばかりでも残らんことを願っています。

序章 白と瓦礫

貴方のことばに、私は笑った

貴方の言葉に、私は涙した

貴方のコトバに、私はまた泣いて、でも、笑うことができた

青年は少女を抱いて座っていた。

冷たい瓦礫の上、温もりのない月明かりの下。硝煙すら上がり疲れた戦災の跡地。命すらも時すらも凍りついたその場所で、青年は眉一つ動かさず、腕の中で瞳を閉じる白雪のような少女を見つめていた。

肌も髪も服も全てが、青空を泳ぐ雲や降り積もった新雪のように真白く、美しく整った顔に儂さを添える。荒廃した周囲の情景に比べ、少女は不自然な程に美し過ぎた。煤の一つもついていない、それは彼女を抱く青年の尽力によるものであった。

はじめは恩と恨み。そして誓い。さらにはまごうことなき、唯一の

愛がそこにはあった。

- - 愛。彼女には、ちゃんと届いて居ただろうか - -

そう考え、青年は口を開きかけるが、直ぐに言葉を呑み込んだ。

少女の目は開かない。彼女はずっと、目を閉じたままだ。青年は開くのを強要しようとはしない。開くのも閉じるのも、全ては彼女の意志。彼女の意志を何よりも優先する、それが青年の誓いでありまた愛であった。

「いつまでそうしているつもりだ？」

近づいて来る足音と、芯のある強い女声に青年はゆっくりと顔を上げた。

- - 自分の鼓動以外を聞いたのは久しぶりだ - - そんなことを思いながら。

視界に写ったのは一組の男女。

どちらもよく見知った顔馴染みであったが、青年はその来訪者に何ら感情も抱けなかった。

「何の用ですか」

抑揚のない声で青年は問う。

「先月廃墟になったある街に何隊かの先遣隊が派遣された。だが、その何れもが街に着いたと思われる頃に音信不通になっているらしくてな」

「その調査に貴女が派遣されたと？」

問いに答えた金の髪の女性の後を青年が引き継ぐ。女性は表情を変えず無言でそれに肯定と答えた。

青年は鼻で笑い、一度腕の中の少女に視線を落として、再度女性とその隣の少年を見据える。

「貴女が調査の為だけにその姿で現れ、尚且つ騎士団長代理まで引き連れて来たと？」

そんな馬鹿な話はない、と青年は言外に付け加えて言葉を切る。元従盾騎士と呼ばれた少年が一步、青年の方へと歩み寄った。

「俺達の任務は先遣隊失踪の原因究明とその要因の排除だ。お前がここを去ってくれば、それで済む。……わかってんだろ？ ここに居たって、何も変わらない。なあ……チアキ」

「黙れ」

青年が突如無だった感情を、燃え盛る憤怒に色を変えて少年を睨んだ。その眼には、目の前の少年と女性、その向こうのモノへの憎悪の焰が宿っていた。

「その名前と呼んでいいのは彼女だけだ。……ここへ居たいと言ったのは彼女だ。彼女が動くと言っまで、僕はここにいる。彼女が選んだ彼女の居場所を僕は守る」

そう言って、青年は少女を静かに瓦礫の上に横たわらせ、立ち上が

る。

「何処かの誰かが選んだのを良い事に、利用するだけ利用して、苦しめるだけ苦しめて。背けば反逆だと貶めて、辿り着いた居場所さえ奪って……。貴様らにわかるのか。彼女が流した涙の数が！引き裂かれた心の痛みが！」

青年の瞳はもはや眼前の二人など見てはいなかった。見えているのは彼らの向こう側。少女からあらゆるモノを奪った、巨大な存在。

「誰であろうと容赦はしない。彼女を苦しめようとするモノ、彼女から何かを奪おうとする存在全て！この僕が喰らい尽くす！」

白き月の下で、一人の青年が叫ぶ。それは、涙を咬み殺した哀しみの叫び……。。

鍵乙女 デビューナー

一台の馬車が野道を走っている。昼下がりの穏やかな春陽に包まれたその道は、森に出来た獣道のように、幾多の人々がそこを通過していったが故に作られた名もなき路。

いつから使われ、誰が初めに通ったのか誰も知らない、けれど、行商人や旅人達の足跡が築き上げてきたものだということだけは語らずともわかることだった。

「オルヴス、まだ着かないの？」

馬車の中から少女が気だるそうな声で、騎手の青年へ問う。

「後小一時間と言ったところでしょうか。この辺りはのどかで、馬もあまり急ぎたがらないようですよ」

姿を見せない声の主の方へ律儀に顔を向けながら、オルヴスと呼ばれた青年はにこやかに答えた。

首が隠れ、目にかかる程度の長さの黒髪に、七分くらいまで捲りあげた白いカッターシャツと黒のベルボトム。

一見で騎手ではないことは誰の目にも明らかであるが、その実、青年は馬の機微もわかるようで、その姿は半ば不可思議にも見える。

「あなた、私と馬とどっちが優先なのよ」

倦怠感に苛立ちを少々加えた声音で少女がまた青年に聞いた。

「そう焦らなくとも大丈夫ですよ。ああ、もしかして“お花摘み”」

ですか？」

「違うわよっ。疲れたの。お腹空いたわ」

不本意なところを指摘されたようで、少女の声は少し捲し立てる様に言葉を次ぐ。

オルヴスはその様子が目に浮かんでいるようで、口元を緩めていた。

「先程の村で作ってきたサンドイッチが荷物の中に入っていたと思います」

先程とは言っても、村を出たのが日も昇る間際の薄暗い時間だったが。

「もう食べた」

「僕の方は」

「……そんなもの最初からなかったわ」

不遜にもそう口にする少女の言葉を、オルヴスは端息混じりに仕方がないと思い、反論はしなかった。

その、なんだか諦められたというか若干呆れたかのような雰囲気を感じ取ったのか、少女の声が弁明しはじめる。

「し、しょうがないじゃない。だってあなたに起こされて直ぐ馬車に乗ったし、乗ってからはずっと寝てて何も食べてなかったし……アンバタだったし」

最後の言葉だけほんの少し上気したようで、またオルヴスは微笑ん

だ。彼自身は騎手をしながら食事を摂るつもりがなかったので、早朝作ってきたサンドイッチは全て彼女の好物のアンバタにしてきたわけだが、それが功を奏したようである。

「全く。あんまり甘いものばかり食べていると虫歯になりますよ」

とはいえ、一応釘は刺すらしい。

「子供扱いしないで。あなたより二つ年上なんだから」

はいはい、とオルヴスは流して馬へ軽く鞭を打った。のんびり散歩気分で歩かせてやりたい所だが、主人はあの様子だし、街は近いので少しばかり頑張ってもらおうとの思惑だ。

大樹の街セパンタ。古くから末端の村々への交易の拠点として栄えてきた街である。故に街とは言っても、都会然とした、石や鉄などの建築物、整備された広い通り等といった物は存在せず、建物の殆どは木造で背も低く、通りは狭い道が幾重にも重なる網の目のようなものである。それでも東西南北に一直線に伸びる十字路兼街の出入り口と、一回りするのにも一日はかかると言われる広さが「街」としての名目を保っているとも言おうか。

そんなセパンタの西門に、オルヴスが引く馬車はようやく辿り着いた。

「アノ様着きましたよ」

馬車を降り、後ろの荷車へと声をかける。少しして、幌の中から一人の少女が現れた。背中まである艶やかで乱れない水色の髪を、両側面から後頭部にかけてまとめ、後ろで一つに結んでいる。日差しに溶けてしまいそうな真珠の肌と凜とした顔立ちで、服装は華美でもない白のワンピースなのにどんな造形にも見劣りしないと思われる程。

「さて、街へ入りまじょうか。この時間なら宿も取れるでしょう」

言いながらオルヴスは手を差し出す。アノと呼ばれた少女は慣れた手つきでその手を取ると、ゆっくりと地面に降りた。

「そうね。ずっと動いてなかったから足が重たいわ」

また眠っていたのだろう。まだ少し眠気が覚めきっていない藤色の眼を擦ってそう告げた。言葉を受けてオルヴスは馬車から荷物を取り出して肩に背負い、馬の手綱を引いて馬車止めに連れて行く。馬車を繋いで戻る際、オルヴスは思い出したように荷車の中に入って中から白い布のようなものを持ってきた。

「忘れてました。大きな街ですし、念の為」

白い布、それは薄手のフードで、少女の頭をすっぽり覆い、目深に被れば顔が見難いように出来ているものだった。

「失礼しますよ」

一言告げてからアノの頭にそれを被せ、紐を結ぶ。

「これ、視界が悪くなるのだけど」

「僕があなたの眼になりますから大丈夫ですよ」

「そうじゃないんだけど……」

アノは以前にもこのフードを被る事を何度か嫌がっており、「幼く見える」だの「今日の服に合わない」だの「あからさまに隠してるって感じが嫌」だの理由をつけるのだが、悉くオルヴスに一蹴されていた。

その経験もあるので逐一アノも食い下がらない。最初から二言三言文句を呟くくらいで、抵抗と呼べるようなことなんて事はないのだが。

「そろそろ参りましょうか。衛兵がアノ様の美貌を見ようとフードの下に目を光らせてますから」

冗談なのか本気なのか、オルヴスは門を警備する衛兵の方へ指を差して微笑むと荷物を持ち上げて歩き出した。

「ばつ馬鹿じゃないの？ そんなことあるわけないじゃないっ」

フードの下の頬を少し赤く染めて反論しながらアノがオルヴスの後へ続く。

そんな毎度毎度のやり取りを終えて、ようやく二人はセパンタの街へと足を踏み入れた。

オルヴスはここセパンタに何度か足を運んでいる為、複雑な街並み

も大体は覚えている。その足取りは迷う事なく、宿のある方向へと歩を進めていた。余談だが、毎回共に来ている筈のアノが全く道順を覚えていない様子で、オルヴスの一歩後ろを着いて来ているのはご愛嬌である。

「相変わらずここは賑やかですねえ」

「こつというのは騒がしいって言うのよ」

オルヴスの感想に苦言を呈し、アノはふと顔を上げた。

何やら美味しそうな匂いが何処からか流れて来ている。それに誘われるように首を巡らせた。

目に止まったのは一見の酒場らしき店。店内は少々薄暗いが、街道の露店や商人、客らの声に紛れて男女含めた笑い声が聞こえてくる。時刻はまだ夕方といったところだが、店自体はやっているらしい。

と、アノはそこまで考えてお腹の辺りの違和感に身体を強張らせる。だがそれは彼女も経験則からわかる通り、無駄な抵抗であった。胃の辺りから伝わる音の振動に、フードの下の顔を林檎のように染めながらオルヴスの隣をそそくさと通り過ぎようとす。彼と肩がすれ違つとほぼ同時にとぼけた声が彼女の耳に届いた。

「美味しそうな香りですねえ。これは、香草焼きか何かでしょうか」

アノの肩が跳ねるように反応したが、足だけ止めて振りかえらない。

「少し早いです、夕飯、食べて行かれますか？」

「なっ、何でよ？」

平静を装ったつもりだろうが、本人は声が少し上ずっている事に気づかない。オルヴスは知らぬ顔で言葉と続けた。

「いえ……お腹が空いたと馬車でも仰ってましたし。……“事”の後だと食べられないでしょう」

後半の台詞にアノが先刻とはまた違った肩の強張りを見せる。目を伏せ、深く息を吐き、そうしてから彼女は少し固い表情で顔を上げた。

「そうね。行きましょう。オルヴス、荷物は大丈夫？」

「はい、お任せください。僕も少々空腹だったもので」

「そう」

対照的に柔らかな笑みを浮かべながら、従者はスタスタと進む主の後を着いて行く。

開け放たれたままの扉をくぐると、店内の喧騒がよりはつきりと聞えた。

アノは迷わずカウンターの一番店奥の席に座り、その隣をオルヴスが着く。少しして、カウンターの店主らしき人物が二人にグラスの水を運んできた。

「いらっしやませ」

「少しばかり空腹を満たしたいのですが、そのような料理もありますか？」

席には品書きがなく、さりげなく店内を見回す少女を尻目にオルヴスが率先してそう問う。

「ここは旅の方も多く立ち寄られますので。まかないのようなものになります。味は保障致しますよ」

チラリ、とアノの方へ視線を向けて許可を取る。当の彼女はどうでもいい、というように視線を逸らしグラスの水を傾けた。

文句ならすぐに飛んでくる。無言なのは、無視ではなく肯定。

そんな素直じゃないやり取りをして、従者は再び店主へと視線を戻す。

「香草焼きはありますか？ 香りに引かれて立ち寄ったのですが」

「ええ。十分程お時間頂きますがよろしいですか？」

「二人分お願いします。あ、それとブレッドを二つずつ」

「かしこまりました。少々お待ちください」

注文を受け取り、店の奥へ行く店主。早々にアノのグラスの中身が空になり、見計らったようにウエイトレスが水筒を持って現れる。

「お二人とも旅の方ですよ。いい時期にいらっしやいましたね」

水を注ぎながらそう口にする。店主が旅の人間もよく立ち寄ると言っていたし、店員である彼女もその辺りの目は養われているのだから。

「いい時期、という事は何かあるのですか？」

「鍵乙女デヒューナーがいらっしやるんですよ！ 教会の神父様のお話だと、もう近くまで来ているんじゃないかとの事です」

- 鍵乙女デヒューナー。世界に五つあるという「門」を開閉する唯一無二の力を持ち、その力であらゆる災厄から人々を護ると言われる神の使い。アヴェンシス教会の庇護の元にあり、その役目の為に命を賭している。

「おや……教会は鍵乙女の動向は秘匿している筈では？」

鍵乙女無くして世界に平穏は無く、それ故にその存在はあらゆる存在から狙われてしまう。それは時に野盗であり、何処かの富豪でありまた国である。だから、教会は鍵乙女の存在は公表したとしても行動・居場所に関わる情報は出さないのだが。

「少し前にここに来た旅の方が言っていたんです。ちょうどその時街の中にフェルが入って来ていたんですけど、その方がお一人で倒してくれまして。その方が去り際に、もうすぐ鍵乙女が門を開くから大丈夫って」

一通り話を聞き終え、オルヴスはグラスの水を飲み干し、一瞬だけアノの方へ目をやる。

平静を装っているようだが、少し肩を落としフードの中に手を当てて額を抑えているようだった。

「にしても街中にフェルが侵入なんて、危なかったですね」

フェルとは、全ての命ある存在に仇なす魔物の事。個々によるが、物によつては単体で一国を滅ぼすまでの力があると言われている存在だ。

「はい……あの時は運がよかったです。あんな腕の立つ剣士さん始めて見ました。って、それはもう良いんですよ。だって鍵乙女様がいらっしゃったらフェルの心配なんて要らないじゃないですか」

鍵乙女が門に触れるとフェルが消える。

これは民衆が鍵乙女を信仰する最も大きな理由となっている。その事例を直接見た者はおらず、完全に消え失せるわけではないが、鍵乙女が触れた門の近くにはある村等では、実感として明らかにフェルとの遭遇件数は減るのだという。

「へっ、その鍵乙女様とやらは一体いつになったら現れてくれるのでしょうかなあ？」

と、ウエイトレスの少女の背後から野太い男の声が水を注す。

「教会の方が仰っていたんですよ？　もしかしたらもうこの街に来ているかもしれませんよ」

救いを手放すまいとしてか少女が反論する。男はその願望が無駄であるとても嘲笑うかのように手に持っていた酒のジョッキを飲み干した。

「元々教会はその辺りの情報はひた隠しにしてるだろうが。大体あの小僧が本当に教会の人間かどうかも怪しいもんだぜ」

「まあまあ落ち着いてください」

そんな不毛な議論にオルヴスが割って入る。正直なところ彼にこの議論は全く関係がないのだが、うるささに頭を抱えた自分の主人を見て動かざるを得なくなつたのだ。

「話していても埒が明きませんよ。なんにせよ、世界中を鍵乙女が巡り門を操作しているのは事実です。確かな情報が伝わらないのはその鍵乙女の身の安全を確保する為。故に皆さんが不安になる気持ちもわかりますが、そこは辛抱頂いて待つてくださると鍵乙女様も心労が和らぐのではないかと邪推しますが」

「けっ、まるで知つたような口振りだな」

「色んな場所を旅しているとたくさんの方々と同じ事を言いますからね」

言う事は言つたとオルヴスは席に戻る。しかし。

「大体鍵乙女様の心労だと？　それが仕事なんだろうが。大事な大事な使命だろ？　それを心労なんかで疎かにされでもしたら、世界中の人間がフェルに食い殺されちまうぜ。ま、鍵乙女様には優秀なフラインダー従盾騎士とやらがついてるらしいからな。どうせ死にやしねえんだらうが」

吐き捨てるように語られた男の言葉は最後まで言い切られる事はなかった。

悪態を吐いていた男の口はオルヴスの右手によって鷲掴みにされ封じられていた。オルヴスの頭より二つ分程高く持ち上げられ、何が起こつたかもわからないといったように身動き一つ取れていない。

何が起きたかわかっていないのはその男のみならず、すぐ側に居た筈のウエイトレスさえも、その店の誰もがオルヴスの動きを全く捉える事が出来なかった。

「お、オルヴス！ 何やってるの！」

「ああ、申し訳ありませんアノ様」

男の顔面を掴んだまま降ろす素振りさえ見せないオルヴスに、いち早くアノが慌てて詰め寄る。だが、彼は主人のそんな言葉にも全く悪びれた素振りを見せず、うわべだけの謝罪を述べる。そして意にも解さないように、視線を右の手に掴んでいる男へと向けた。

「大事な使命、確かにその通りですね。鍵乙女が動かなければ世界中にフェルが蔓延し、人々の生活はままならなくなるでしょう。それほどまでに大事な使命に、欠片程の心労もかからないと？」

返事を待つように台詞に間を持つが、男がそれに答えられる筈もなく、ただ恐怖と動揺に染まった眼を向ける。

「まあ、少し考えればご理解いただけるでしょうが……酒の席での暴言とはいえ、見逃せませんね、先程の言葉は」

「オルヴス、もういいから」

アノが男を持ち上げたままの腕を抑え、止めに入る。オルヴスはここではじめて店内の視線が自分達に集中している事に気付いたのか、肩を竦めて見せた。

「そうですね……わかりました」

興味が失せたとしても言わんばかりに無造作に手を離し、男を床へ落とす。男の知り合いらしき数人が彼の元に集まったが、意にも介さず、アノの方へと向き直った。

「食事どころではなくなっしまいましたね」

「全く、誰のおかげだと思ってるの」

周囲に出来た人垣を眺めながら苦笑すると、その中から一人、身なりのいい初老の男性が前へと出てきた。

「失礼。私はこの街の保安官をしている者です」

何の脈絡もなく現れたその人物に多少の警戒を込めた眼差しを込めながらオルヴスが前へ出る。

「何か御用でしょうか」

「いえ、たまたま店の前を通った所何やら騒ぎが起きていたようなので。この街は多くの人々が行き交う故にいざこざもよく起る。それを取り締まるのが私めの仕事でございます。少し、お話しを聞かせてもらえますかな？」

「……わかりました。それでは」

「待ちなさい」

保安官の言に承諾の意を示そうとしたオルヴスをアノが制止し、前へ出る。次から次へと舞い込むトラブルに嫌気が指して来た様子だ

った。

「やっぱりこんなのあるだけ無駄よ。邪魔だし」

言いながら、アノが街に入る前に被らされた白のフードを剥ぎ取ってオルヴスへ返す。途端、それまでざわざわと雑言を交わしていた烏合の衆が水を打ったように静寂を取り戻した。

そこに居る誰もが、アノの素顔を凝視し、言葉を失う。先程まで酔った勢いで騒いでいた男でさえも啞然と開いた口が塞がっていないかった。

「私の従盾騎士が失礼を働いた事、お詫び申し上げます。しかしながらそれは私、鍵乙女アーノイス・ロロハルロント・ポーターを案ずるが故の行為。どうか恩赦くださいますようお願い申し上げます」

その様子を一瞥した後、アノは整然とした態度で周囲の民衆へ頭を下げた。数瞬の沈黙が流れる。

「……鍵乙女様」

誰かがそう口にした、その瞬間。狭い店内を先程の騒ぎを大きく上回る喧騒 歓声に包まれたのだった。

アーノイス

アーノイス・ロロハルロント・ポーター。ギティア大陸の東に位置する、大国ロロハルロントの“元”王女にして現在の鍵乙女。元というのは鍵乙女となった時から彼女の身柄はアヴェンシス教会の保護下に置かれ、何人たりとも容易に近づく事が許されない存在となった為である。鍵乙女は文字通り世界の安寧の鍵となる存在で、自らを選んだ従盾騎士と共に世界に五つあるとされる「門」を巡る旅をする。

大樹の街セパンタにはその門の一つが置かれている。街の名前にもなっている、天を衝く大木セパンタの元に、他の門同様、初代鍵乙女となった人物が造ったのだという。

現在の鍵乙女であるアーノイスはその門を目指し、この街へと辿り着いたのだが。

「全く、聞いているんですかアノ様？」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

その鍵乙女は現在、自分の従者である筈の従盾騎士の青年に、領主の屋敷の一室にて少々お説教を喰らっていた。

扉も窓も大きめの物が一つしかないが、赤を基調とし綺麗に整頓された部屋に一つだけある椅子にアーノイスが腰掛け、オルヴスがその前に立っている状況だ。

「確かに騒ぎは事もなしに終わりましたが、外、見てくださいよ。街中全部を上げてのお祭り騒ぎになってるじゃないですか。鍵乙女は民の前に姿を現さずに使命を全うするものなのですよ？」

鍵乙女は本来、民衆に知られぬ間に門へと赴き、その役目を果たす。しかし今回はアーノイスがわざわざ自分の素性を明かし、すでに世界中の人間に知られていると思われる素顔を公表してしまったおかげで、セパンタの街は完全に祭りのような雰囲気になってしまっていた。街の全貌を見渡せる部屋の窓からは、日も沈んだと思えない程の灯りに包まれて、人々が歌えや踊れやの大騒ぎの様子が伺える。

「元はと言えばオルヴスが騒ぎを起こすからでしょ？ 私は大人しくしてたつていうのに……」

「僕は従盾騎士ですから。貴方が無碍に扱われて冷静で居られないのは当然です」

あくまで毅然たる態度で自己正当化するオルヴス。アーノイスはその言葉に呆れるやらでも嬉しいやら、複雑な心情を込めた眼差しで溜息を吐いた。

「ですが……すみません。思慮が足りませんでした」

「い、いいのよオルヴス。まあ、街の人たちも歓迎してくれてるみたいだし、宿代もかからなかったし、ね」

とはいえやはり思うところがある様子のオルヴスへアーノイスがフオローを入れる、が。

「拘束したりせずに、真っ先に排除してしまえば良かったですね」

「そっじゃないから!」

その思うところというのは、彼女の予想と違い随分と的外れだった。

「はあ……全く。貴方はどうしてそう直線的な考えしかないのかしら」

「はははー、アノ様に言われたくはありませんよー」

冗談はやめてくださいとでも言わんばかりに軽く笑うオルヴスだったが、不機嫌さを隠さない主のジト目を向けられて押し黙る。なんだかんだ、主には逆らえない従者の青年。

従者が反省の色を垣間見せたのを見て、アーノイスは一つ咳払いをして言葉を続けた。

「こ、今回は私もその、思慮が足りなかったわ。でもそれは貴方も同罪だから、両成敗って事で、この話は終わり！ いいわね」

「お言葉の通りに」

それにオルヴスが恭しく膝を着く。

「……私も、もっと鍵乙女らしくならなくちゃ……」

頭を垂れたオルヴスには聞こえないようにか、アーノイスは己に言い聞かすかの如く呟き、立ち上がった。

「さて、そろそろ行きましようか。あまり長居してしまうのも悪いし、今夜の内に済ませてしまいましょ」

それは門を訪れての儀式。鍵乙女が世界を巡る唯一の理由。絶対の使命。

「準備はよろしいのですか？」

オルヴスが確認を取る。アーノイスはそれに頷くだけで答え、部屋の出口へと向かう。それに先立ち、オルヴスが扉を開けた。

音もなくそよ風すら感じさせず瞬時に動く従者の動きは、彼女にしてみればさして驚く事でもなく、もはや慣れたものだ。

「それでは裏口から大樹の元へ参りましょう。正門では領主殿が鍵乙女様に民衆へスピーチして欲しいと首を長くして待っていますから」

「それは……御免蒙るわ」

「丁重にお断りしたのですけどね。きっと姿を見たら逃がしてくれないよあの様子では」

民衆の為に、引いては世界の為に、平等に。それが、彼女の役目なのだ。

門

二人は人目に付かないよう、屋敷の裏口より街の外へと出た。街を覆っている塀はオルヴスがアーノイスを抱え、一足で飛び越える。今、門から出て行ったとしても衛兵も酒に酔っていると思われる程の喧騒が未だ聞えるくらいだが、念には念を入れて、だ。

「大樹は北門の道を通り直ぐに向かうだけですな」

道の向こうは夜という事もあり、月と星の明かりだけで行き先は暗い。しかし、目標とする大樹は街から漏れる灯りで影が伺える。夜闇にさらに一層濃く浮かび上がる天まである巨大な一本の樹。空へ空へと向かって伸びるそれは、まるで道標のようにも思えた。

無言で先へ進むアーノイスとオルヴス。門での儀式に神具も魔具も必要ない。大切なのは鍵乙女という存在そのもの。言いかえれば、鍵乙女以外に門へ干渉する方法はない。

段々と細くなる街道、それが獣道のように代わり、周囲の木々が大樹が見降ろす空を隠した路をまた少し進んで、二人は「門」へと辿り着いた。

そこだけが切り抜かれたように木々も草花もない。円形に象られた広場の中央に先程影でしかなかった大樹セパンタが見える。

「本当、何度見ても驚く大きさね」

樹に近づき、もはや先が見えないセパンタを見上げるアーノイス。

「この樹は千年前、初代鍵乙女が門を創った際に共に植えた種が成長したものとされています。千年も昔からこの場所に居たんですね」

セパンタの樹冠が今どうなっているのかは誰も知らない。頂点は既に雲を突き抜け、気球を用いたとしても見えない場所にあるのだ。

「そしてこれも、千年前造られた時からずっとここにあるのね」

そう言つて、セパンタの根元すぐ近くにある巨大な壁を撫でるアーノイス。

木でもなく、石でもなく、金属でもない堅く分厚いそれは、両開きの四角い「門」。高さは5m、幅は3mといったところ。どう見ても何かの扉にしか見えないというのに、その向こうにも無論こちら側にも何も無い。ただ、そこに立たされているだけの扉。靈呪術を用いて造られたその門には炎のような、水のような、風のような、何とも取れない複雑な印が模様のように浮かび上がり、厚く、堅く、冷たく不気味で、近くにいくだけで心が引き締められる清廉な空気を放っているようにも思える。

アーノイスは触れていた手を離し、五歩ほど距離を取った。今一度門を見つめてから目を閉じ、一度深呼吸をする。

「……オルヴス。はじめるわ」

「……了解しました」

アーノイスの宣言を受けてオルヴスは周囲の気配を探り、何もない事を確認してから返事した。

もう一度、鍵乙女は呼吸を整える。そして、静かに、両腕を広げた。

オルヴスは少し離れた場所でそれを見守る。周囲への探りは忘れな
いものの、主からは決して目を放さない。これまでも幾度と行って
きた儀式。それでも、気は抜かない、抜けない。
それほどまでに大事な事なのだ。

静かに、儀式ははじまった。

アーノイスと門、その双方から陽の光とも月の光とも取れる光が生
まれ始める。ぼんやりと灯るのみだったそれは徐々に形をなし、門
は印を、アーノイスはその身体から、四肢から、門と似た刻印の光
を輝かせる。徐々に強くなっていく輝きが閃光となる寸前で止まり、
荘厳な音を立てて門が開き始めた。

何と擦れているわけでもなく、まるでこの世界そのものと擦り合っ
ているかのような声を上げながら門がひとりでに開く。その向こう
は闇。黒い靄が蠢いている、そんな様子だった。

門が完全に開き切ると同時、その靄から幾つもの光の球が飛び出し
た。赤、青、緑、その他同じ色などはないかと思わせるほ
どに色とりどりに光る拳大程の球体は次から次へと「門の中」から
飛び出していき、まるで何かに導かれるかの如く天へと昇りその姿
を夜闇に溶かす。

空へ螺旋を描きながら昇り消えて行く光の球の出現が少なくなつて
くる頃、アーノイスは広げていた両腕を閉じ、胸の前で交差させる。
それに反応するように突如として靄の色が黒から一切の淀みがない
白へと変わった。澄み切った純白だというのにまるで眩しさを感じ
ないそれに人が抱く感情はきつと、安堵だろう。

だがしかし、それは長続きのしない安息の光であるのかもしれない。

靄が完全に白へと変わった途端。門の周囲の空気が震え、木々を揺らす。

あらゆる方向から、何かが向かってくるのをオルヴスは感じ取っていた。だが、アーノイスの儀式に毎回付き添っている彼は特別身じろぎをせず、ただずっと、自分の主の背中を見つめる。そして、大気を震わす正体が悲鳴も似た風切り音を立てて現れた。

それは黒い光球。先程の色とりどりの鮮やかなそれとは明らかに異質な光を放つ、が、明らかに違うとも言えないその球体。そして、突如現れた無数の黒い球体群は真つ直ぐに、門の向こうにある白い靄の中へと吸い込まれて行った、その瞬間。

「うっ……ああっ……！」

それまで目を閉じ、瞑想していたアーノイスが苦悶の声を上げた。交差していた両手で自分の肩を握り締め、爪を立てて唇を噛む。口元からはすぐに血が滴りはじめ、彼女の身体は何かには怯えるかのようには震えていた。

オルヴスはその様子を見、思わず飛び出しそうになるのを寸前で堪えた。ここで止めてしまつては儀式は完了しない。無数の光を空へと還す、そんな綺麗なだけの儀式ではない。それを彼も知っていた。闇から現れる闇よりも黒い夥しい数の球体が流れて行く、凄絶な光景。先程の鮮やかな光球の螺旋など嘘のよう。

黒い球体の集合が勢いを増すごとに彼女の震えは酷くなり、遂には膝を着く。まるでそれが合図とでもなつて、黒球はその襲来を止まつた。

震える両腕を無理やり動かすようにアーノイスが胸の前で両手を組むと、「門」は大きな音を立てて閉じる。

と同時、なんとか膝支えられていた少女の身体は糸が切れたように崩れ落ちた。

「頑張りましたね……アノ」

地面に落ちる前にオルヴスが受け止め、頬笑みかける。アノノイスは目を瞑り、既に気を失っていた。

肩と膝に腕を回してその身体を抱きかかえるオルヴス。門は儀式の前と同じように、異質な空気を放ちながらも静かに佇んでいる。

血が滲む唇を自分の服の裾で拭い、オルヴスは抜けだして来た屋敷に戻るべく歩き始めた。

従盾騎士　　ブラインダー

大樹の街セパンタを出発して数日　　。

二人は次の門を目指して再び旅を続けていた。

「アノ様、前方に山小屋が見えますが如何いたしますか？　この先は一つ峠を越えなければならぬのでこのまま進むと野宿になりますけど」

時は夕暮れ。空は晴れていて風も穏やかなままだが、オルヴスが言う通り、彼らの前方には山道へ続く路とそれに少し逸れて山小屋らしきものが見える。オルヴスは野宿であつても別段問題はないのだが、門の儀式は周期的に行う事に行っている為、急ぐ旅でもないのだ。

「寝れる所があるならそつちにしましょう。貴方も疲れてるでしょ」

アーノイスもそれは熟知しているので、そう決断した。

「僕の事はお気遣い無用ですが」

「私ともう馬車に揺られ飽きたのよ。いいから早くその山小屋とやらに行きましょう」

「わかりました」

いつもの微笑を浮かべながらオルヴスは馬を山小屋の方向へと向かわせた。

「割と新しいようですね。誰かが立て直したのでしょうか」

外見は木造の古びた小屋そのものだったが、中は最近補修されたよう
うでまだ木の香りが残っていた。大きめのベッドが奥にあり、右の
手前にレンガ造りの暖炉とそれに使う薪が、反対側には毛布等がま
とめて置いてある。

「この暖炉、着火の呪術がかけてあるのね。これはまた随分便利な
山小屋なこと」

アーノイスが暖炉の中、丁度中央に刻まれている印を見て呟く。
ものに直接印を刻み、大気や大地に満ちる霊力を使って様々な現象
を引き起こす術を総じて呪術と呼ぶ。呪術はこの暖炉のみならず、
人々の生活に深く根ざし、支えている。

「可燃物を置くと勝手に火が付いてくれるように刻んでありますね。
これはまた随分と高尚な……きつと火系術の才に恵まれた方が作っ
ていったんでしょう。アノ様、うっかり踏んでしまわないよう気を
つけてくださいね」

「そんなことしないわよ。ちゃんと柵だつて付いてるじゃないの」
呪術は印を刻んであればその通りに術が起こるが、効力のある術を
刻むには持つて生まれた素質が必要になる。高度な術になれば成る
程その必要性が高くなるのだ。

「ふむ……少々薪を足して置きますか。僕達が使つ分には十分ですが、この山小屋は妙に親切ですからね」

荷物を部屋の隅に置き、小屋を出て行こうとする、が。

「……どうかされましたかアノ様」

歩みを止める、否、止められるオルヴス。視線を足元に送ると、暖炉の前に座り込んだアーノイスが彼の片足の裾をしっかりと掴んでいた。

「待ちなさい。薪なんて明日の出発前でもいいでしょ」

「いや、でもまだ陽が落ちるまで時間がありますし……」

「つ、疲れてるでしょ」

「ええと……僕は別に」

あくまで外に出て行こうとするオルヴスをアーノイスはどうしてか中に引き留めたい様子。

「お腹空いたから先に食事」

「ああ、せっかくですから何か探ってきてきましょう。山ですから探せばすぐに見つかると思います」

「うー……わ、私がすっかり暖炉の所に毛布でも落として火事になったらどうするのよっ」

「一秒経たずに飛んで来ます」

恥を忍んで捻りだした口調からして最後の一言だったようだが、問題はないとオルヴスに結論づけられてしまう。彼ならば実際に有言実行出来るので尚更何も言えない。

万策尽きたようでも未だ手は放さない主の姿を見、仕方なく、オルヴスは溜息混じりに笑って折れる事にした。

「わかりました。薪割りには明日の出発前にする事にします」

「そ、そう」

素気ない返事ながらもようやく手を離すアーノイス。

「ですが食料は今持っている保存食を使うより現地調達した方が後の為にいいと思うんです。ですから、アノ様も一緒に参りますか？」

「そうね。たまには散策するのもいいわ」

「はは……散策じゃなくて狩猟採取なんですけど……」

アーノイスの手を取って立たせるオルヴス。

彼女が独りになりたくない理由。それもわかっている手前、無理を強いる事は彼には出来なかった。

「オルヴス、この真っ赤なキノコ美味しそうじゃない？」

「それはあれですね。口にしたら三分で天に昇れます。地獄にも墮ちれます」

「あ、あれ大きな木の実ね」

「あれはアカミノスバチの巣です。木の実に似せた巣を作り、寄ってきた鳥を逆に補食する危険な蜂です。触らないでくださいね」

「お、オルヴス。このモフモフしてるの何？」

「ええと……眠っている熊ですね。大きいな……4mくらいですかね」

元王族の鍵乙女様は100%の天然自然に触れるのは珍しいようで、気の抜けない時間となってしまったオルヴス。山の中に入るのはこれがはじめてというわけではないのだが、彼女自身の足でゆっくりと散策するのは今までなかったかもしれない、と改めて思い直す。いつも馬車の中で寝ているかオルヴスと雑談を交わすか程度だからだ。

フラフラと出歩くのは彼がまずさせないというのもあるが。

鍵乙女である彼女はいつその身を狙われているかもしれないのだ。護衛として、従盾騎士として気は抜けない。その事はアーノイスも十分熟知しているだろう。故に、そんな精神の負荷からも守らなくては、オルヴスは思うのだった。

「さて、そろそろ戻りましょうか。材料は十分ですし。今夜は熊鍋にしますかねー」

「わ、私……熊は食べた事ないのだけれど……大丈夫かしら」

「美味しいんですよ。手とか」

思わず出会えた巨大な食糧を片手で引きずりながらオルヴスが笑顔でそう語るのを、アーノイスは洗面で見つめていた。

声

『……たい……』

『……き……い……』

『………生きたい』

ああ、またこの声。

原因も正体もはっきりしているのに、いつまで経っても慣れる気配がないその声、言葉、心。

『生きたい』

わかってる。わかってるから、私に叫ばないで。

『生きたい』

あっちの声は沢山聞こえてくるのに、こっちの声は全く届いてくれない。

『生きたい』

やめて。貴方達の願いはわかってるから。

『生きたい』

お願いだから聞いて。

『生きたい』

大丈夫。終わりじゃないから。また、新しく生まれ変わるだけだから。

『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』
『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』
『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』

同じ言葉で、 同じ想いで、 そんなに一度に叫ばないで。

『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』
『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』
『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』
『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』
『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』
『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』
『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』
『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』
『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』
『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』
『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』
『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』 『生きたい』

誓い

「もうやめてよ！」

叫び声と共にアーノイスは飛び起きた。身体は汗だくで起きたばかりだというのに息が上がっている。

山小屋のベッドの上、窓から望む空はまだ夜だった。虫も鳥の声も聞こえず、深い夜だというのが経験からアーノイスにも何となくわかった。

荒い呼吸を整えて何とか落ち着きを取り戻そうとする。だが、余りにも静かな夜という環境が、夢から醒めた今でも先程の声をリフレインされるような気がして、彼女は思わず耳を塞いだ。無駄な事は分かっている。だが、恐怖が彼女をそうさせていた。そのまま、ふと気づいて小屋の中を見回す。満月の月明かりが入って来ているおかげで、室内は少しくらいなら見えた。故に、自分が眠りに着くまではそこに居た筈の存在が消えている事にすぐに気付く。

「……どこ行つたのよ」

独り暗闇で呟いてベッドを下り、小屋の出口へ向かった。本来ならそこまでで彼を踏みつけていてもおかしくはないのだが、残念ながらその感触はなかった。

ゆっくりと戸を開き外を見る。人工的な灯りなんてものは一切なく、月明かりだけがぼんやりと昼間見た外を照らして、まるで別世界のようだった。

「眠れないんですか？」

突如掛けられた声に驚いてアーノイスの身体が跳ねる。けれどその声の主がよく知っている人物の声で彼女の心に安堵が戻ってきた。それはまるで酷く久々の感覚にも思えていた。

「お、オルヴス、貴方何してるのよ。そんなところで」

声の主、オルヴスは小屋の前の階段に腰掛けている。別に手に何かを持っている様子もなく、一体全体何をしているのかアーノイスにはわからなかった。

「いえ、特に何をしていたというわけでは。アノ様こそ、大丈夫ですか？ 酷い顔をしていますよ」

言って、オルヴスはポケットから取り出したハンカチで汗の滲むアノの額を拭う。

「や、やめなさいよ。それに、酷い顔とは何よ酷いとは」

少しの間されるがままにしていたものの、恥ずかしさが勝ったのかやめさせて、オルヴスの言葉に膨れたフリをするアーノイス。

「いえ、アノ様はお美しいですよ？」

「そういう事を言ってるわけじゃ……」

反論しかけて自分の言葉が先程とちぐはぐになっている事に気づいて言葉を失う。

「それで、どうかしたんですか？」

オルヴスはそれに気づいた素振りを見せず、話を元の場所へ持つて行った。アーノイスは少しの間口をつぐんでいたが、オルヴスが何も言わず見つめて待っていて、ゆっくりと口を開く。

「また、声が聞えたのよ。それだけ」

それだけ、と強がっては見たものの、オルヴスにそれは通用しない。そんな事は彼女自身熟知しているが、それでも繕わずには居られない性分なのだ。

「靈魂の声、ですか……今度教会に戻ったらその辺りについて詳しく調べてみましょう。何かいい策があるかもしれません。残念ながら僕の知識ではその辺りの事は上手い解決方法が見当たらないもので」

最近になって彼女の耳に届き始めたという声。オルヴスも詳しい所までは聞かされていないが、どうやらそれは彼女の行う儀式が原因となっている気がするとの事はアーノイス本人が以前語っていた。

「あ、ありがと……でも、いいのよ別に。そんなことまでしなくたって」

オルヴスの言葉に珍しく素直に感謝したものの、遠慮を示すアーノイス。そんな彼女に従者は首を横に振った。

「僕は貴方を守ると誓った、貴方の従盾騎士です。それが僕の使命ですよ」

そこまで言われては押し黙るしかなく、少女は顔を背けて青年の横に腰を下ろす。

その後少しして、少女は青年の肩を借りて眠りはじめた。もう、声は聞えなくなっているようだった。

グリム

「アノ様、アノ様。起きてください」

次の日。アーノイスは獣道に揺れる馬車の中で目を覚ました。

オルヴスは山小屋を既に出発し、アーノイスを荷車の中に寝かせ、馬を走らせていたらしい。

すぐに出発するような時でもオルヴスは滅多に彼女の事を起こさない。だが、今回は敢えて、馬車を止めてアーノイスを起こしに来たのだ。まだ寝惚けが抜けきらない彼女の頭でもその事の次第は理解出来た。

「何かあったの……？」

目を擦りながらも声を小さく抑えてオルヴスに問う。

「ここで動かずに待っていてください。いいですか？ じっとしていてくださいよ」

具体的な答えは出さずにそう主人に耳打ちすると、オルヴスは静かに荷台から出て行った。怪訝な瞳を向けるアーノイスだったが、事態を把握しきれない為、下手を打つ事も出来ず、言われた通りに身を固め、幌の隙間から外と出て行った従者の様子を窺う。

山の中に入っていると想像、陽の光もあまり入っておらず、太陽の位置からして真昼間だというのに薄暗い。

加えて生き物の声がせず、辺りは変に静まり返っているように感じられた。

アーノイスはそんな様子を把握すると、目を閉じ、嗅覚、聴覚を意識から排する。目に見えず、音に聞こえず、何も匂わない。そのどれでもない時、人はもう一つの異変の可能性を感じようとする。世界に人にあらゆる生命に満ちている「霊力」。命の力そのものと称されるそれは、生物の五感のさらに外の感覚で知覚されるものなのだ。

「これは……」

アーノイスは目を開き、独り呟く。その瞳には少々の驚きと呆れの色が濃く写って見えた。

「さて、かくれんぼはそろそろ止めにしませんか？」

馬車の前に立ち、真っ直ぐ前を見据えてオルヴスが柔らかな口調で、そう虚空に問いかける。

当然のように返答はなく、オルヴスは溜息をついて首を振った。次の瞬間。

オルヴスの見つめていた方向から唸るような音、同時に巨大な火球が出現し、真っ直ぐにオルヴスへ向けて放たれた。

草木を焼き払い、地面を溶解しながら迫りくる閃熱。

「オルヴス！」

荷台からアーノイスが身を乗り出して叫ぶ。それに応えるかのよう

に、ゆつくりとオルヴスに右手が、火球へ向けて翳された。着弾する火炎。しかしそれは爆散するでもなく、またオルヴスも馬車も焼失させるべく突き進むでもなく、ただ、ぶつかったその場所で動かない。

「全く、出てこないでくださいと言いましたよ？ アノ様」

翳した右手で事もなしと火球を抑えながら、主に向けて苦笑を向けるオルヴス。その手は淡い青白の光を帯びていた。軽くその手を振り、炎をかき消す。

「し、仕方ないでしょ！」

「大丈夫ですから。サンドイツチでも食べて待つていてくださいよ」
真剣に叫ぶアーノイスを若干からかうかのように彼はゆったりと歩を進め、馬車と距離を取った。

「もう……いつもいつも」

呆れて悪態を吐きながら、アーノイスは自分が寝ていた所の横にバスケツトが置かれているのを見つけ、手を伸ばす。

「アンバタじゃなかったら後でお説教ね」

「いいいいやつはああああ！」

アーノイスが呟いたのと奇声が轟いたのはほぼ同時。
オルヴスの遙か頭上より襲来する、炎の剣を振り翳した一人の男。空を“蹴り”、一瞬で肉薄しその剣を振り下ろす。

「相変わらず騒がしい方ですね。グリム」

「相変わらず企画外な奴だぜ！ オルヴス！」

先程の火球同様、オルヴスの光を纏った手が斬撃を防ぐ。力が拮抗した瞬間に二人の身体が跳ね、距離が置かれた。

「んー、やっぱ切れねえか。せめて火傷くらいは負わせたかったんだけどなあ」

身の丈程もある大剣を両肩に担ぎ、右に左にと揺れる、グリムと呼ばれた男。年はオルヴスよりも一つ二つ下程度。燃え盛るような紅い髪に同じ色の眼。教会の金のタウ十字が描かれた白い服の上に鎧の肩当て、膝当て、胴当てだけをつけた格好だ。

「貴方こそ。詠唱もなしにここまでの火炎を起こすなんて、靈術の基本を無視していますね」

己の持つ靈力に詠唱を重ね、現象を起こす術を総じて靈術と呼ぶ。靈術は呪術とは違い、主に人々が戦う術として使われるものが多く、先程グリムが見せた空中での動きも、靈力を固めて足場とする靈術の基礎の一つである。その程度ならコツさえ掴めば詠唱は不要だが、グリムの起こした火炎という現象はそれに当てはまらない。いくら修練を積んでも、靈術の法則から外れるのだ。しかしそれはオルヴスが纏う光の方にも言えた事ではあるが。

「俺様は特別性なんだよ」

言って、剣を地面に叩きつけて炎を纏わせるグリム。

「続きやろうぜ。ここんところ碌な敵と会っていないんだよ。セパンの儀式が終わってここら辺はフェルと全然遭遇しねえし」

「僕は貴方の敵ではなく同僚なんですけどねえ……」

グリムの格好から分かる通り、彼はただの変な襲撃者ではない。オルヴスと同じ教会に属する騎士の一人。

元従盾騎士候補グリム・ティレド。若齡でありながら以前は教会一の腕を持つとされた男だ。

「んだよー、細けえこたあいじゃねえかよおー。久々に会ったんだぜ？ 剣と拳で愛し合おうぜ？」

教団内でも常勝無敗とされてきた彼。だが、それも数年前にはじめての敗北を喫している。鍵乙女アーノイスの御前で開かれた、従盾騎士を決める為の武闘大会。その最後の戦いでグリムはオルヴスと戦い、敗れたのだった。

「お前だけだオルヴス。俺が戦ってて、どうしようもないくらい楽しいのは！」

それは彼にとってこの上なく予想外で、喜ぶべき事だった。グリムの剣が纏う炎が、感情に合わせるように膨張する。火炎はもはや剣を覆い尽くし、グリム自身の身体さえも包み込んで、空気を焦がす。

「本当、熱い男ですねえ……」

オルヴスも、彼がこうなってしまうては説得では止めるまで面倒になるので戦闘態勢を取る。腰を落として上半身を逸らし、顎を引いて相手を見据え、両の腕の力をダランと抜いた独特の体勢。

「んだよ。本気でやってくれないのかよ？」

だが、それでもグリムは不満げにオルヴスを睨む。

「この姿のまま、少々お相手させていただきますよ」

オルヴスはそれに、口角を僅かに上げて嘲笑を返した。無論、わざと挑発しているのだ。

「チツ……後悔すんなよ！」

さらに火力を上げたグリムの周囲の地面が赤熱化し、溶ける。

「させてみてくださいよ」

オルヴスの言葉が合図になり、二人が同時に直進し

「オルヴスー!!」

森を震わす程の怒気をはらんだ絶叫が、止めた。

「うわっ！」

高速で動いた二人に吹き飛ばされた大気が戻る勢いで起きた突風に、荷台から出てきたアーノイスは堪えながらも、視線は自分の従者を睨みつけている。

オルヴスとグリムはお互いの拳と剣がぶつかる寸前で止まったままだ。

「え、ええと……如何なさいましたかアノさ」

「どうもこうもないわよ！ 何よこれ！ このサンドイッチ、ピクルスが入ってるじゃないの！」

「えっ、それ僕のなんですけど……」

戦いの最中であつた事を忘れ、構えを解き、怒れる主の元へ弁明すべく近づいて行くオルヴス。

彼の主はピクルスが大嫌いであつた。

「サンドイッチなんて食べないと中身わかんないじゃない！ 分けてるなら名前書いときなさいよ！ むしろサンドイッチは全部アンバタにしときなさいよ！」

「そんな無茶苦茶な……」

流石にこれは予想外だつたか、オルヴスも少々頭を抱える。そんな二人の様子を見てか、グリムもようやく固まつた状態から剣を降ろしてアーノイスらの方を見た。

「おいおいアーノイス様よお、俺達今戦つてたとこなんだけど」

「ああ、やっぱりあんただつたのねグリム。何でこんなところにいるのよ。あんたは目的地の偵察が任務でしょ。私達に追いつかれてどうするのよ」

不機嫌さを隠しもせずグリムへも未だ怒つたままの視線を向けるアーノイス。

グリムは溜息を吐き、取り敢えず大剣を背中の中の鞘にしまいこんだ。やる気が削がれてしまつたらしい。

「俺だつてさあ、もう二つも先の村に居たのに教会がさあ、二人に一度戻つて来いつて伝えるなんて言うからさあ、急いで戻つてさあ、きたんだけどさあ」

「は？　なんでよ？」

「知らねーよー……まあここからなら教会もそんな遠くないし、鍵乙女様の大好きなアンバタでも買いに戻れば？」

戦う事以外は基本的にどうでもいい性分のグリムは頭の後ろに手を組んでその辺りをフラフラとしてはじめる。元従盾騎士候補とはいえ、彼は別に敬遠な信者でも鍵乙女を守るといふ使命に惹かれたわけでもなかった。

「では一度教会に戻る事にしましょうか。わざわざ呼び付けるといふ事は何か大事な用があるんでしょう」

「待ちなさいオルヴス。その前にこの私の後味の悪さを何とかしなさい」

ピクルスの独特の酸味や塩味が未だ口の中に残っているのだろう。気分が悪そうに顔を歪ませるアーノイス。

「あ、ははは……今代わりを作ります……」

「全く、本当我儘なお姫様だな……」

オルヴスは愛想笑いを、グリムは呆れて眩きを漏らしていた。

フェル

「そういえばグリム。セパンタでフェルと戦ったそうですね？」

「あ？　なんで知ってんだよ。まー俺様にかかれば小物だったが、街の警備団やただの掲剣騎士クワイターにや荷が重そうだったからな。腹こなし程度に　」

グリムが合流し、教会へと進路を変える一行。オルヴスは騎手を、アノは幌の中、グリムは「鍛錬の一環！」と馬車に併走していた。

「ご丁寧にアノ様の事を吹聴したそうですね」

「ああー……そんな事もあったっけか……」

山道を抜けて野道を進む三人。何も無い原っぱに続く、人々の足跡が作った路がただ一本、地平線の彼方へと続いている。

「そのせいでトラブルを被りました。大司祭様にご報告しておきますね」

「ちよつ待てよー、わざわざ親父に言い付けるこたあねえだろ。フェルっていう化物の襲来に怯える無辜の民草に、一筋の希望を与えてやっただけだぜ？」

「駄目よ。そのせいで騒ぎになっちゃったんだから」

「そついう事です」

冷たい二人の言葉にがつくりと肩を落とすグリム。年頃の少年に有りがちなように、彼は父親である大司祭との折り合いがよくなかった。本来ならば司祭の後を継ぐべく教会にて信官となるのが通例であるのに、本人は現在掲剣騎士の一員として、オルヴスとアーノイスの二人に先んじて門の元へと赴き、道中の危険その他を排除、探知を目的とした任についている事からもわかる。

掲剣騎士とは、アヴェンシス教会の庇護の下に人々を守る為に剣を掲げる騎士たちの事である。本来はそれぞれの街や村の教会に駐在し、その街をフェルから守る事を役目としている。グリムは形だけは掲剣騎士となっているが、前述の通りの仕事をしているので、普通とは違う扱いの場にあるが、教団の構成員には変わりない。それを総括しているのが彼の父親である大司祭となっていた。

「ったく……あの糞親父、俺がなんか小さなミスしても付け込んでこごぞとばかりに説教喰らわすからな。やってらんねーっつーの」

「……まあ、あの件はグリムだけのせいではないのですが」

「ん？ 何か言ったかー？」

「いいえ何も　ん？ グリム、止まってください」

雑談の最中、ふと前方を見たオルヴスがある事に気づき馬車を止める。何事かとアーノイスも幌から顔を覗かせた。

「どうかした？ オルヴス」

「女の子、ですかね」

す、とオルヴスが道の先を指さす。そこには一人の藤色の髪をした

童女が何をするでもなく立ち尽くしていた。

「こんなところであんな小さい子一人何してんのかねえ。ちょっとら聞いて来るわ」

「いつてらっしやいロリコン」

真っ先に近づいて行こうとしたグリムの出鼻をアーノイスがくじく。突然の言われようにグリムが思わず地面に突っかかり振り向いた。

「あのな姫様？ 俺は別に幼女趣味じゃないの。幼女にコンプレックスとか持ってないから」

「何言ってるのよ。メルシアにいつも引っ付かれてるじゃない」

「ばっ、あれは幼女とかそういう次元の人間じゃないだろが！」

メルシアというのは教会にいる、ある少女の事だが今は割愛。

二人がくだらない言いあいをしているのを余所に、オルヴスが未だ棒立ちのままの少女に近づいて寄っていった。

「あっ、オルヴスの奴……なあ、あいつの方がロリコンっぽくないか？」

「オルヴスをあんと一緒にしないで」

「はいはい……いつもながらゾッコンですこと」

そんな二人を尻目に、オルヴスは少女の眼の前で屈み、目線を合わ

せて話す。

「一人で何をしているのかな？」

「あのねー、待ってるの」

少女は突然現れた青年にも怖気づく様子もなく、朗らかな笑顔を浮かべて応えた。

「待ってるって誰を？ お母さんかお父さんかい？」

オルヴスの言葉に首を左右に振って否定する。

「んーんー。鍵乙女さまがね、近くにいらっしゃるって、そんちよーさんが言ってたから」

それを聞き、オルヴスは怪訝な表情を浮かべた。

そこへ、言い合いを終えたのがグリムとアーノイスもやってくる。

「んで？ なんだってオルヴスさんよ」

「あ！ 鍵乙女さまだ！」

オルヴスがグリムの問いに答える前に、少女がアーノイスの方へ駆け寄る。突然の事に少々驚いたアーノイスだったが、無垢な少女の笑顔を見、柔らかな笑みを浮かべて膝を折った。

「えっと……どうしたの？ 確かに、鍵乙女は私だけ……よくわかったわね」

「写真で見たの。おとーさんが、新聞を見せて『これが新しい鍵乙女様だよ』って教えてくれたの。うわー、写真で見るよりもっと綺麗ー」

「あ、ありがとう……」

忌憚ない子供の贅辞に照れるアーノイス。そんな事はどうでもいいグリムは、先程から何か考え事をしているようなオルヴスの方へ声を掛ける。

「で？ 結局何だったんだ？」

「さあ……僕もまだ聞き損ねてしまして」

思索に更けるのをやめてグリムの問いに答えると、オルヴスはもう一度少女の側へと行く。

「お嬢さんお名前は？」

「ユレアだよ」

「ユレアちゃんか。いい名前だね。ユレアちゃんは何で鍵乙女様を待っていたのかな？」

そう、今度は核心を突いた質問をする。すると、少女は表情を曇らせて少し俯き答えた。

「村の近くにフェルがたくさん居て、危ないから鍵乙女様に助けてもらおうと思って」

答えを受けて、二人の表情が険しくなる。残りの一人たるグリムは嬉々として自分の拳を鳴らす。

「フェル、ね。よっしゃ、ここは一つ俺様がちゃちゃっとな片付けてやるつかね。嬢ちゃん任せな。フェルの百匹や二百匹、マツハで消し炭にしてやんよ」

「あははっ、マツハってなーに？」

「マツハってのはな、すつげー速えって事だ」

「すつげーはええ……？」

グリムが少女と戯れている間に、アーノイスがオルヴスに話しかける。

「ねえ、オルヴス……」

続きを言い淀むアーノイス。それを見てオルヴスは肩を竦めて見せた。

「アノ様が行かれると仰るのであれば行きますよ。グリムも居ますし、フェルならばそれほど時間はかからないでしょうから」

「うん。行きましょう……あんまりこういう事に首を突っ込むのはよくないのは、わかってるんですけど」

鍵乙女は門を開閉するのが何よりの、唯一の使命である。故に、このような小事　　と言っては当事者に悪いが　　に　　一々構わず、旅を優先するのが第一だ。その為に教会も掲剣騎士を各地に派遣して

いるのだから。

「村の近くに出ている、とわかっていて見過ごせる筈ありませんからね」

しかし、アーノイスがそれを常に適応出来るような人間ではないと、オルヴスはわかっていた。

自分も行くと伝えるべく、彼女は少女の元に向かう。

「……それに、少々気になる事もありますし、ね」

それを見つめていたオルヴスの咳きは、誰の耳に届くでもなく風に溶けていった。

兄妹

ユレアの案内で一行は件の村へと向かった。

彼女居た道端からそう遠くはなく、五分程歩くと小さな建物がいくつが集合して建っているのが見え始めた。

「こんなところに村があったなんてねえ。教会は知ってんのかね？」

村というよりは集落と言った方が合っているかもしれない。舗装された道などは存在せず、雑草を刈り取って地べたを道と見立てているようで、小さな木造の家々が適当な感覚で立ち、その周囲だけ雑草が背丈を合わせて刈られ、野菜などを育てたりもしているようだ。

「フェルが近くに出ているというのにわざわざ鍵乙女様を待っていたのです。恐らくは最近出来たか、もしくは閉鎖的な場所か……」

オルヴスの言葉通り、村に入ってもあまり人影は見当たらない。フェルが出没しているというのも関係しているのだろう。

「この前までね、牛さんとか馬さんとか鶏さんとかたくさんいたんだけど、皆逃げちゃったの……」

村を見回す三人にユレアは沈んだ顔をしてそう告げた。

フェルは、命あるものに仇なす存在だ。人間然り、牛や馬といった動物、鶏などの鳥、虫ですら彼らの中では襲撃対象になっている。例えば村の中で飼われていたとしても、己の生命を脅かす何かがあるにいてるのであれば、逃げるのも仕方がない事である。

「大丈夫よユレアちゃん。このお兄ちゃん達がフェルをみーんなや

つつけてくれるから。そうすれば牛さん達もきつと帰ってくるわ」

「本当？」

「ええ、本当よ」

アーノイスの言葉にユレアは破顔すると、軽快な足取りで一件の木造家屋の前へ走っていった。

「ここが私のお家！ えっと……ながたびでお疲れでしょう。きゅくつ？なところですが、くつろいでいってください」

一生懸命に言葉を絞り出すように歓迎の挨拶を述べる少女。

「へえ、ご立派な挨拶だな。誰に教えてもらったんだ？」

感心し、グリムがそう問う。

「おにーちゃんがね『もし鍵乙女様に会ったらこう言いなさい』って教えてくれたの！」

褒められて嬉しそうな笑みを浮かべて、ユレアは自宅の扉を開いた。

「ただいまー！ おにーちゃんー！」

元気な声で帰宅を告げ、家の中に消えて行く少女。

「えーっと……私達どうすればいいのかしらね」

置いてけぼりにされたアーノイスが首をかしげる。

「先程も言いましたが、教会はなさそうですしね」

「ま、取り敢えず入ってけばいいんじゃないかねー？ あの子だってアーノイス様を待つてたんだろーし」

思案するオルヴスとアーノイスを余所にグリムは何食わぬ顔で、開けっぱなしの扉の中に頭を突っ込む。

「ごめんくださいーい。鍵乙女と従盾騎士の愉快的な御一行ですけどもー」

「いきなり胡散臭く聞えるのは私だけなの？」

「いえ、僕も同感です」

とはいえ、もう進んでしまった事は元に戻せない。二人もグリムに続き、家の前で待機する。

少して、家の奥から翠色の髪をした青年と、その足元にひつつくユレアが出てきた。

「ああ、貴方方が……」

「ね？ ね？ 言ったでしょ？ 鍵乙女様だよ！」

鍵乙女の突然の来訪に少々面食らった様子ながらも、青年は深々と頭を下げる。

「遠路はるばるようこそいらっしやいました。こんな辺鄙な村にまで足を運んでいただけるなど……感謝の言葉もございません」

「たまたま近くを通りかかったものですから。そこでユレアちゃんが一人で見つけまして」

オルヴスが率先して前へ出て青年を言葉を交わす。

「ね？ 嘘じゃないって言ったでしょおにーちゃん」

「ああ。でもユレア、一人で外に出ては駄目だとあれほど言ったろう」

「ごめんなさい……」

優しい口調でユレアを叱りつけると、青年は三人の方へと向き直った。

「申し遅れました。私はユレアの兄のクオンと言います」

「へ？ 兄妹？ びっくりしたぜ、親子かと思った」

「はは、良く言われます」

ユレアは5、6歳と言ったところ。青年はどうみてもオルヴスと同じかそれ以上に見える。グリムが驚くのも無理はない事だった。

「立ち話もなんでしょうから上がってください。狭いところですが、お茶ぐらいお出しできますよ」

「おっ、いいねえ。ちょうど腹が減ってたんだよねー」

「貴方はもう少し遠慮というものを覚えましょうか」

クオンの提案で、三人は家の中へと入る事にした。

招かれ、小さな円形の木テーブルに着く三人。

ユリアとクオンはキッチンでお茶の用意をしているようだ。

「良いわねこういう家。落ち着くわ」

木製のテーブルの手触りや質感を目で確かめるように眺めながらア
ーノイスが呟く。

「姫様は庶民の暮らしに慣れがなさそうだもんね」

テーブルの上にとだらしなく上半身を伸ばしたグリムが明後日の方向
を見ながら悪態を吐いた。

「貴方だってボンボンでしょ。大司祭のドラ息子なんだから」

「だーもう、親父の話はだすなよなあ」

「まあまあ、アノ様とてもう旅を続けて長い。最近ではようやっと
野宿も慣れてきたようで何よりですよ」

いつもながらの不毛な駄話をはじめ二人をオルヴスが宥める。

「へえ、未だにオルヴスの事を使用人みたいにしてんのかと思ったけど」

「ああ、それは変わりませんよ」

「オルヴスっ！」

アーノイスが赤面して立ちあがる。野宿でも寝られるようになったとはいえそういう環境の変化にも身体がすぐに慣れてくれるようになったというだけであった。

「それは貴方が私にさせないからっていうのもあるでしょ！……まあ、その、確かに私は不器用だけどやればできるわよ！」

「炊事洗濯買物その他雑務は全て僕の仕事の一部ですからね。仕事を取られてしまったては立つ瀬ないわけですよ」

オルヴスの、擁護しているのかどうなのかわからない言い回しに、グリムはただ興味なさそうに欠伸をしていたが、ふと気付いたように顔を上げた。

「なあ、家事全般は全部オルヴス任せなんだよな？ 洗濯とか」

「さっき言ったでしょ。悔しいけど、そういう事ね」

「じゃあ姫様のパン」

「オルヴス」

「はい」

「ぶべっ！」

何かを口走ろうとしたグリムの顔面に、主人の許可を得たオルヴスの拳が飛ぶ。容赦のない一撃はグリムを椅子から転げ落ちさせるには十分過ぎた。

「ぐおおおお……オルヴスてめえ、こういう時だけすぐに手え出しやがってえ……卑怯だぞ」

あまりに素早い奇襲にもろに喰らってしまったらしいグリムは顔面を押えて床を転がる。

アーノイスは既にそっぽを向き、オルヴスは虫けらでも見る様な冷やかな視線でグリムを見下ろしていた。

「大丈夫ですかグリム？」

「効いたぜこん畜生……だが、無事だ」

「ちっ」

「ちよ、おまつ、今舌打ちしやがったなオルヴス！」

にこやかな表情を崩さないままのオルヴスに、一挙動で立ちあがったグリムが食ってかかる。しかし、反応はごくごく冷やかなものだった。

「死ぬば　いえ、せめて記憶が人格を失えば良かったなんて、これっぽちも思っていないですよ？」

「いや、ホントすんません。反省してます。反省してまーす」

「……オルヴス」

最後のやる気のない謝罪が気に入らなかつたようで、再度オルヴスに指令を出すアーノイス。

「はい」

「ちょ、待つ、やめろ！ わかつた！ わかつたから！ いやマジすんません、ごめんなさい！ もう二度と言わないって！」

席を立ち、指の骨を鳴らしながら近づくオルヴスと土下座しながら後退するグリム。

そこへ、お茶の準備を終えたらしいクオンとユレアがやってきた。

「おや、何やら楽しそうですね」

「あははっ、剣士のお兄ちゃんそれどうやって動いてるの？」

「これはすみません。お見苦しい所をお見せしてしまって」

グリムを追い詰めるのを止め、カップを並べるのを手伝うオルヴス。その隙を突き、グリムは席に戻った。

願い

「それでは、十日も前からフェルが近くに棲み付いていると？」

ユレアらが淹れた紅茶を飲みながら、オルヴスはクオンに、この村に出没しているというフェルについての詳細を聞いていた。

グリムはユレアと何やら談笑しているし、アーノイスはその双方の中間にあつて時折視線をオルヴスやユレアの方に向けながら、カツプを傾けている。

「ええ。奴等は森の何処かに身を潜め、夜になると村の方へと降りてくる。今はまだ村に張つてある結界が持つていますが、それもいつまで持つか……」

クオンは沈痛な面持ちで俯き、そう語った。

「結界……この村には霊呪術を扱える方が？」

「結界の方は一応私が。扱える、という程ではありませんがフェルからこの村を何とか匿う程度の物は仕上げました」

霊呪術とはその名の通り、霊術と呪術を組み合わせたもので、呪術のように刻んだ印に霊力を注ぎこんで現象を起こす術の事を言う。しかし霊呪術は定義が広く、それだけに留まらないのだが。単に呪術を使うよりも単に霊術を使うよりも、それは高度な才能を要求する。

「成る程。通りで、この村には匂いがしないわけですね」

オルヴスの要領を得ない物言いにクオンが疑問符を浮かべる。それに気付कि、オルヴスは笑って説明した。

「ユレアちゃんと出会った時、僕は彼女の話す村の気配を探りました。人が集まっていれば、そこに霊力が集まっている匂いを感じる事が出来る。でも、それが感じられなかった。それはつまり、その村は存在していないか、隠されているか。どうやら正解は後者だったみたいですよ」

クオンはそれを聞いて感心していた。

「流石、鍵乙女様に選ばれた従盾騎士様だ。霊力の匂い、ですか。確かに言われてみればわからなくもないが、意識したとしてもはっきりなんて私にはわからない。いやあ凄いな」

「貴方も霊呪術を扱えるなら、感覚さえわかれば感じ取れるようになると思いますよ」

言葉を切り、カップの中身を飲み干すとオルヴスは、さて、と腰を上げた。

「アノ様、グリム。フェルの居場所が掴めました。早々に片付けてしましましょう」

オルヴスの宣言を聞き、それまでユレアと戯れていたグリムが立ちあがる。

「よしてきた！ さーてえ、齒応えのある奴はいるかなあー」

「遊びじゃないのよグリム……って言っても無駄よね」

苦言を呈しながらもアーノイスも席を立ち、カップを置いた。

「鍵乙女さまたち……もう行っちゃうの？」

既に出発の準備は出来たと言わんばかりの三人に、ユレアが寂しそうな声音で聞く。

「うん……私達はね、ユレアちゃんのように私達の助けを待っている人がいるから。だから、行かなきゃならないの」

少女の前で屈み、言い聞かせるようにその小さな頭を撫でるアーノイス。

そうして離れようとする、が。その腕は小さな両手に掴まれて引き留められてしまった。

「ユレア、鍵乙女様の邪魔をするんじゃない」

クオンが叱りつけるも少女はただ首を横に振るだけ。

アーノイスは掴まれてしまった腕を振り払う事も出来ず、どうしたらいいか困り果ててしまった。

「すみません、両親が早くに他界してしまって、私あまり相手をしてやれないが故に我儘に……。ほらユレア、手を離しなさい。鍵乙女様が困っているだろう？」

二度目の叱責。しかしながら少女は手を離さない。両親を知らないが故の寂しさが、彼女をそうさせるのだろう。

「……仕方ありませんね。アノ様はここに残っていてくださいます

か？」

その様子を見て仕方ないと判断したのか、オルヴスはそう進言した。彼としてはアーノイスの意志を尊重したいが、このままでは埒が明かないとの判断だ。

「え、でもオルヴス……」

「グリム」

躊躇いを見せるアーノイスを余所にオルヴスはグリムへと声をかける。

「いつてらっしゃいませ」

「はっ、そー来ると思ったぜ。お姫様が動けないんじゃ、お前が動く筈ねーもんな」

彼の意図を理解していたグリムはいつものように悪態をつきながらも、意気揚々と扉の方へ向かう。

「フェルの探知くらいなら貴方でも出来るでしょう？」

「なめんなっ。あいつらの気配くらい小物一匹のがさねえっての！ そんじゃ後でなユレアちゃん。鍵乙女のおねーちゃんに目一杯遊んでもらいな」

言って、グリムは一人家を出て行った。

「い、いいのですか？ 彼一人に行かせてしまって」

予想外の展開に戸惑うクオンが何とかそう言葉を発する。

「大丈夫ですよ。振る舞いは雑ですが腕の方は確かです。それに彼は事戦いに関してだけは異様に頭が切れる。もし何かイレギュラーがあってもヘマはしないでしょ」

質問に答えながら、オルヴスは再び椅子に腰かけた。

「すみませんが、お茶のお代わりをいただけますか？」

「あ、ああ、はい。今お持ちしますね」

要求されてキッチンの方へ行くクオン。それに入れ替わるように、今度はアーノイスがオルヴスの前に立つ。片腕はしっかりと少女に捕まっていたままだが。

「ちよつとオルヴス、グリム一人に行かせて良かったの？」

掲剣騎士にフェルの討伐へ行かせる。形としては間違っていないが、引き受けたのが自分である為、何処となくバツが悪そうなアーノイス。

「アノ様こそ。ユレアちゃんを引き剥がして行っても良かったんですか？」

「それは……」

そんな彼女にオルヴスはいつも通り笑って言葉を返す。

「『鍵乙女に言葉は要らず。彼の者は心の声のみを聴き、その願いを叶う』。教会の聖書の一節でしたね。今回のそれにふさわしいと思いますか」

しかしながらアーノイスはまだ煮え切らないような顔をしたまま。オルヴスは一つ溜息を吐くと、ユレアには聞こえないようアーノイスの耳元で囁いた。

「貴方が此処に来ると言ったのはフェルを倒す為ですか？ それとも少女の願いを聴きいれたからですか？」

それだけを告げてオルヴスは席に戻る。丁度クオンが新しいお茶を淹れて持って来た。

「あの……鍵乙女さまっ」

黙りこんでしまったアーノイスの手をユレアが引く。

「どうしたの？ ユレアちゃん」

固くなってしまった表情を何とか和らげて少女の方へと向き直る。そんなことにも気付かない様子のユレアは笑顔で彼女に言った。

「一緒にお風呂入る！ 剣士のおにーちゃん、フェルなんかマツハでやっつけるって言ってたもん。きつとすぐ帰ってくるよ」

「マツハ……ね。そーね、うん。えーっと」

「あまり広くはないのですが……それでよろしければ」

浴室を使う許可を得ようと言葉を選ぶアーノイスにクオンが先だつて答える。

「お風呂はこつちだよおねーちゃん！」

兄の許可も得て元気が出たのか、狭い家の中を走り始める少女。

「あつ、ちよつと、そんなに引つ張らなくなつて大丈夫　きやつ」

「ユレアー、ちゃんと浴槽を洗つてからお湯淹れるんだぞ」

「はい」

クオンの言葉への返事はもう既に壁を1、2枚過ぎた声だった。

「すみませんね。お茶も出して頂いているのに」

相変わらずのペースでお茶を啜りながらオルヴスがそう言う。

「いえ、フェルの討伐なんて無茶を頼んでいるのに、その上妹の我儘にまで付き合っていただいて……何だか申し訳ないくらいですよ」

クオンは苦笑いで頭を掻くのだった。

印

「えーっと、どうしよう」

クオン、ユレア兄妹の家の浴室。その脱衣場で、アーノイスは一人途方に暮れていた。

ユレアはというと、「おねえちゃん早く来てねー！」といつの間にやら服を脱ぎ捨て、早々に浴室へと消えてしまった。

アーノイスも了承はしたものの、ある事情により未だ衣服を脱げずにいる。

彼女は元々れつきとした皇族であり、着替えや風呂に至るまで世話役が側に居た事もあって、同性の前で裸になる事が別段恥ずかしい事ではない。それも相手は自分より一回り以上年下の少女である。

これが少年であればオルヴスに任せられた所なのだが、そうするわけにもいかず、流されるままに承諾してしまったのだ。

「ふう……仕方ない、わよね」

一呼吸吐き、身に纏っていたワンピースをはだける。純潔の真白い肌が顕わになる、と同時。その白い腕、足、身体に絡み付く赤黒い「紋様」が認識出来た。

これが、彼女が躊躇っていた理由。鍵乙女の烙印。門を開く為の鍵そのもの。通称「アウヘンシス世鍵」。世界にあらゆるものの開閉を自在とするその力は、神が与えし力だと言われている。過去の文献などにも烙印の紋様は確認されておらず、また知っていたとしても通常の霊呪術のように操る事が出来た人間は皆無で、何の力も発揮しないただの模様にしかならないのだ。

アーノイスがこの烙印がされた裸体を人目に晒すのはこれが三度目。

一度目は、幼いある日、突如この烙印がなされた時に妹と母に。二度目は、教会の“巫女”に鍵乙女であるという照明をする為に。そして、今。

考え過ぎと言えはそうかもしれないが、それでも、彼女はこの身体を他人の眼に晒す事に抵抗があつた。紋様は美しくも禍々しさも内包している形、色。

世界には己に靈呪術をかけ、力とする術もあると聞くが、そんな人間は彼女の知る限り一人だけで、その人物も今は彼女の心の中にかいない。

「君は、どんな気持ちだったのかしらね。チアキ……」

最後にそう呟いて、アーノイスは浴室へと入っていった。

「おねーちゃん遅いよー！」

既に浴槽に浸かっていたユレアが膨れた顔をする。

「ごめんごめん。そーだユレアちゃん、こっちおいで。おねーちゃんが髪、洗ってあげる」

椅子を前に出し、ユレアを誘うアーノイス。少女はすぐに笑顔でその椅子に座った。

「シャンプーは、これね」

手にシャンプーをつけ、ユレアの髪を優しく洗い始める。

「ふーんふふーん」

鼻歌を歌いながら、上機嫌に足を踊られるユレア。

「私ね、妹が居て、ペルネっていうんだけど、昔はこうしてよく髪の毛洗いつこしたのよ」

懐かしそうに目を細めながら手を動かす。

「鍵乙女さまの妹かあ、どんな人なの？」

「んーとねえ……しつかりもので、なんでも出来て、それですつごく可愛いだよ。料理も上手で、特にお菓子作りはうちのパティシエが困るくらいだったわ。さーて、そろそろ流すわ。ユレアちゃん息止めてるのよー？」

言って、桶のお湯を被せて洗い流す。ユレアは小動物のようにぶるぶると頭を振って水気を飛ばすと、アーノイスの方へ向き直った。

「今度は私が洗ってあげるね！」

椅子を渡し、シャンプー片手に立ちあがる。

「それじゃあ、お願いしましょうか」

少女の申し出を断るわけもなく、アーノイスは椅子に座った。

「おねーちゃんは髪もきれーだね。あれ？ おねーちゃん、この赤くて黒いのなーに？」

小さな手で一生懸命アーノイスの長い髪を洗う最中、少女は烙印に気付いたようでそっと指で触れる。

「ひゃんっー！」

「わわっ、ごめんなさいー！」

いきなり背中に触られて驚いたのか、悲鳴をあげるアーノイス。それに合わせてユレアもびっくりして謝った。

「ごめんね、ちょっとびっくりしただけだから。えっと……これはね、鍵乙女の印、なんだってさ」

「しるし？」

心の苦しさをアーノイスは表に出さないよう必死に声を絞った。この紋の異様さは誰よりも自分が一番よく知っていた。

「それとね……私の約束の形、でもあるんだ。約束って言っても、誰かとしたわけじゃなくて……いや、私としてはしたんだけど、うーんなんて言うかな」

全てはある幼き日の出来事。その出会いがなければ日々がなければ、自分の約束がなければ、今こうしていなかったかもしれない。そう、アーノイスは思い返す。

「鍵乙女さまの、大事なものなんだね」

そんな心の内を感じ取ったのか否か、わからないがユレアはそう口にした。

「そうね。今の私にとって、一番大切なのよ」

その言葉の端はどこか痛々しく、悲しげに聞えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6360u/>

白月に涙叫を

2011年10月13日09時01分発行